

# 生き生きと表現できる子をめざす国語科学習

——話すこと・聞くことの指導を中核として——

村上 百合子

一、はじめに

「先生、私、みんなと話し合うのが好きになってきたよ。だって、どんどん自分の考えが深まっていくし、友達の話聞いてみると、分からなかったことや知らなかったことが分かるようになるもん。」

目を輝かせながら、A子が私に語ってくれたことである。四月当初A子は、自分からほとんど発言しないような子だった。A子に限らず、自分の話し方や考え方に自信が持てず、発表を避けようとする子がずいぶんいた。

「どうして話せないんだろう。どこにつまずきがあるのだろうか。」そんな疑問を抱き、要因を考えてみた。

- ・授業がパターン化され、受け身的なものであって、つまらない。
  - ・学習の仕方（一人読み・仲間読み・意見のまとめかたなど）がよく分からない。
  - ・自分の考えに自信がもてない。
  - ・みんなの前で間違えたら恥ずかしい。
  - ・考えはもてても、それをどうまとめ発表してよいのか分からない。
- い。

などが挙げられる。

もっと一人一人が意欲的に課題追究をし、もっと一人一人が自分の考えを生き生きと表現できるようになったら、どんなに素晴らしいだろうと考え、研究を進めることにした。

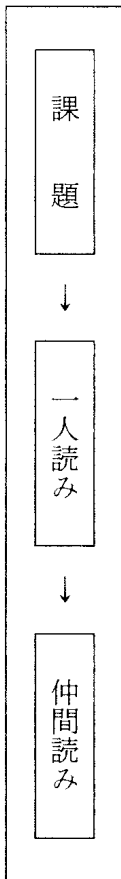
## 二、研究仮説

一人一人の意欲的な課題解決の活動を通して、「話すこと・聞くこと」に対する満足感もてる学習活動の工夫をするとともに、その子らしさが生きるはげましを行っていけば生き生きと表現できる子が育つと考え、次のようなことを研究内容として実践を行った。

- (一) 話すこと・聞くことに重点をおいた学習活動や学習形態の工夫
- (二) 話すこと・聞くことの関心・意欲・態度、技能を高めるみとどけとはげまし
- (三) 学級経営における言語環境づくり

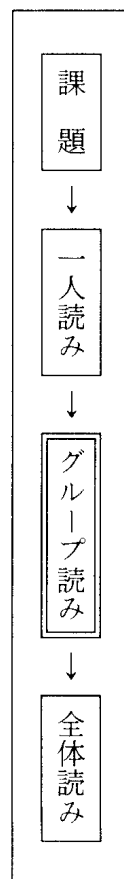
## 三、実践——仮説(一)

★少人数での学習を取り入れて  
今までの学習形態は一斉学習で、



というスタイルをとって行っていた。自分レベルの読み(一人読み)

を足場にして、仲間読みで自分の考えを表現するわけだが、仲間読みの中だけで話すには、時間や話す人数も限られてくる。話す力を培うには、その足場をしっかりとせ、また、一人一人が話す場を少しでも多く授業の中に取り入れるべきであると考えて、次のように学習形態を変えてみた。



グループ読みという少人数での学習を取り入れることにより、四十五分間という限られた時間の中で、より効果的に学習できると考えた。

- ・少人数の中では、話しやすくなり生き生きと表現できる姿がより多く期待できる。
- ・少人数の中では、話す場が多くなり、自分なりの見方・感じ方・考え方を確かにすることができると考えた。

というメリットがあげられる。

そこで、まず、グループ読みを位置付けるにあたり、次のような学び方指導を行った。

グループ読みの約束と進め方

○グループ(三〜四人)の中で、全員が自分の考えを話すこと。

◎自分が一番大切にしたい言葉をポイントに話す。

○司会者を立て、話し合いがとぎれないように進める。

○発表する順番を考える。

・ 第一発言者(グループの中で順番を決めて)に同じ考えの子がまず初めに話す。

・ 次に違う考えの子が話す。

・ 考え方の違いに目をつけて、さらに自分の考えを付け加えていく。

また、物語文教材の中で、生き生きと表現できる子を育てていくためには、自分の考えをしっかりと一人読みの場を大切に扱っていくことも重要なことである。なぜなら、表現しようとする気持ちの裏付けとなるものが、理解に大きく関わっているからである。

四月当初の子どものノートを見ると、書き込みの仕方がよく分からない状態だった。

そこで、自分の読みがしっかりとれるようにどんな言葉に着目し、どう書き込んだらよいかを、プリントやOHPを使って具体的に何回か指導した。

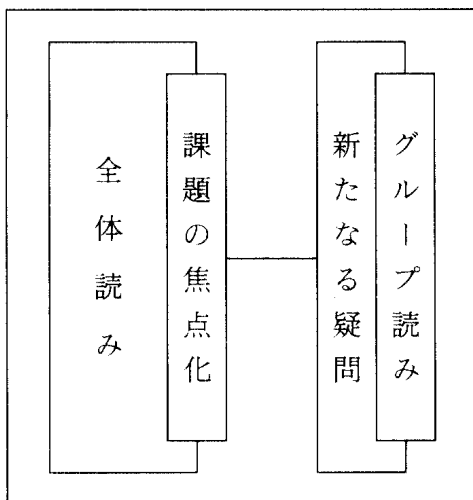
以上のことをふまえて、二つの実践を紹介することにする。

(一) 六月 四年教材 「白いぼうし」

この「白いぼうし」では、グループ読みに入れた学習形態をとった。

第二場面で、ちょうの代わりに夏みかんを入れておく松井さんの気持ちを共通課題として読み進めた。グループ読みでは、「どんなにがっかり」や「ため息」などの言葉から、松井さんがたけおくんを思う気持ちがどんどん読み深められていった。話し合っているうちに、それぞれのグループでは、新たな疑問が生まれてきた。

あるグループでは、「松井さんにとっては、母親さへ感じさせる大事な『あの夏みかん』を、いくらたけおくんのためとはいえ、なぜ、ちょう一匹のために、帽子の中に入れてしまったのだろう。」という疑問が生まれてきた。



全体読みに入り、そのグループの疑問を聞いた多くの児童は、「ぼくも、それがよく分からなかった。」「そういえばそうだなあ、ど

うしてだろう……。」「そこについて、もう少しみんなで考えてみたいな。」という声が聞かれ、ここで課題が焦点化された。

「せつかくのえもの」と「あの夏みかん」の言葉から、それぞれの価値を追究して、「それぞれが、自分にとっては宝物なんだよ。だから松井さんは、自分の宝物の夏みかんをたけおくんにあげたんじゃないかな。」と、更に読み深められていった。

グループ読みを位置付けたことによって、一人一人の話す機会が増えたことは言うまでもなく、交流することで自分の考えが確かなものとなっていき、それが自信となって、全体の場でも積極的に発言する姿がたくさん見られた。

さらに、理解面においても、より多くの言葉に目を向け、考え方を広げ、深めていくこともでき、また、焦点化された課題を生むことにもつながった。

しかし、グループ読みから全体読みへのつながりや、全体読みの在り方が課題として残った。

## (二)——十一月 四年教材 「二つの花」——

前述の実践の反省を生かし、「二つの花」でもグループ読みを取り入れた。全体読みの中で、一人一人の考え方の違いを、もつと的確に位置付けることによって、さらに読み深めていけるのではない

かと考え、パネル的な話し合いを取り入れてみた。

この单元では、一斉学習ではなく、課題別グループ学習で、次のような流れで行った。

### 課題別グループ学習の流れ

①初めの感想をもとに個人課題作り。

②全体での課題交流。

③個人の課題をもとに通し読み。

・音読

・課題に関わる語句に着目し、書き込みをする。

(一単位時間毎に、課題に対する読みのまとめをノートに書く。)

・調べたいことがある場合は、学習センターで調べてもよい。

④一番みんなと話合ってみたい課題(通し読みをした上で出てきた課題)を出し合う。

⑤同じ課題の子同士が集まって、四人ぐらいのグループを作り、着目した言葉や書き込んだ内容について話し合う。

⑥グループごとに話し合ったことを全体で交流する。

⑦読み深まったことをまとめる。

これは、子どもたちのやりたいという声を生かして、一緒に学習

計画を立てたものである。

⑤、⑥であげられてきた課題は、初めの感想で多く出てきた、四場面のお父さんやゆみ子の気持ちに集中した。

⑥で、ゆみ子に手渡す一輪の花に込められた父の願いを話し合った時のことである。

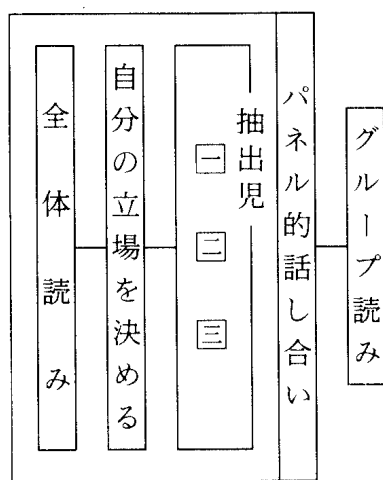
まず、読みの違う児童を教師が意図的に抽出した。⑤のグループ読みで、教師があらかじめ把握しておいた。そして、下記のようなそれぞれの考え方を聞かせた上で、自分の立場をはっきりさせた。意見が対立している時にも、生き生きと表現する姿が期待される。

父の願い

一、コスモス一つしかあげられないけど、お父さんだと思って、大事にするんだよ。

二、一つしかない命を大事に、コスモスのように力強く生きてほしい。

三、コスモスのように優しく、清らかな心で、幸せに暮らすんだよ。

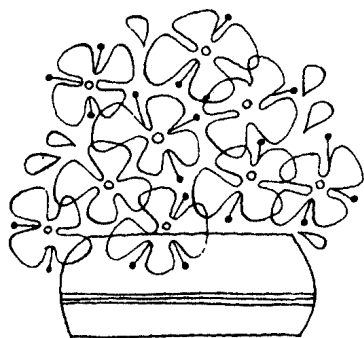


その後、パネル的な

話し合いにして、三つの考えを基に「父の願い」を追究していった。

この時、自分の立場をはっきりさせて話し合いに入ったため、白熱した話し合いとなった。

グループ読みを全体読みでどう生かすかを考えた時に、このパネル的話し合いも生き生きと表現できる子を育てるための、有効な実践の一つである。



四、実践——仮説(二)

★「話すこと・聞くこと」の小教材を通して

物語文教材や説明文教材においても「話す力・聞く力」は培って  
いけるが、「話すこと・聞くこと」の小教材こそ、「話す力・聞く  
力」を培う大切な単元である。四年生でいうと、「分かりやすく話  
すには」、「あったらいいなこんなもの」、「ぼくは、わたしは豆  
記者」という単元である。(資料1-1、1-4)

この小教材は、「話す力・聞く力」を培う単元だからといって、  
話す技能ばかりを優先させるのではなく、話す心を大切に、自分  
らしさを出して表現できる子をめざしている。

ここでは、「あったらいいなこんなもの」からの実践例を述べた  
い。この単元は、自分のイメージしたものを相手に分かりやすく伝  
えるには、どうすればよいかという話し方の工夫と、聞く時には、  
どんなことに気を付ければよいかという聞き方の工夫をねらいとし  
ている。

下れは、第三時の実践である。

本時の 目標	自分の思っていることを、相手によく分かるように話し、相手の 話すことをよく聞いて大事な点を的確に理解することができる。
-----------	--

本時の展開

過	主 な 学 習 活 動				
つかむ	1. どんな話し方をしたらよいか、自分のめあてを立てる。				
ふかめる	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">                     自分の思いが相手によく分かるように、話し方を工夫しよう。                 </div> ★ 2. 発表メモや発表原稿をもとに、めあてに向かって話す練習をする。 (選択学習) <table border="1" style="width: 100%; margin-top: 5px;"> <tr> <td style="width: 25%;">                     ・一人で発表原稿を修正しながら、話す練習をする。                 </td> <td style="width: 25%;">                     ・テープレコーダーを使って、自分の話ぶりについて聞きながら練習する。                 </td> <td style="width: 25%;">                     ・ペアを作ってお互いに聞き合い、より分かりやすい話し方を考えていく。                 </td> <td style="width: 25%;">                     ・先生に話す内容を聞いてもらいながら練習する。                 </td> </tr> </table>	・一人で発表原稿を修正しながら、話す練習をする。	・テープレコーダーを使って、自分の話ぶりについて聞きながら練習する。	・ペアを作ってお互いに聞き合い、より分かりやすい話し方を考えていく。	・先生に話す内容を聞いてもらいながら練習する。
・一人で発表原稿を修正しながら、話す練習をする。	・テープレコーダーを使って、自分の話ぶりについて聞きながら練習する。	・ペアを作ってお互いに聞き合い、より分かりやすい話し方を考えていく。	・先生に話す内容を聞いてもらいながら練習する。		
まとめる	3. グループ内で順番に発表し合い、聞く人はメモをとる。 4. グループ内で感想を交流し、友達の良さを認め合う。 5. 学習を振り返って自己評価し、がんばりを話す。				

その子らしさが生きるみとどけとはげまし

…… みとどけの窓 …… ・自分のめあてに向かって、あったらいいなと思うものについて、分かりやすく話そうとしているか。 ・話の要点を書きとめ、分からないことやもっと知りたいことを質問しているか。	— 話し手に — ・発表原稿を見ずに話せるようがんばっているね。 ・めあてに向かって何度も練習している姿がすごいね。 ・順序よく話せたね。 ・イメージしていることを具体的に話せたね。 ・自分のイメージを分かりやすく相手に伝えるには、どんなことを話したらいいかな。
---	--

学習活動の二では、話の構成や話し方の工夫を、自分のめあてに向かって、自分のやりたい方法を選択して練習をした。

ここで、この選択学習を入れたのは、二つ理由がある。一つ目は、一時間の学習の中で、一人一人が学習のめあてをもち、自己決定の場をもつことによって、話すことへの関心・意欲・態度が高まるであろうということ。二つ目は、自分のめあてにあった練習方法で練習をしたり、話し方のめあてが書いてある評価カードをもとに練習したりすることにより、話すことの技能を高めることにつながるのではないかと考えたからである。

また、「話すこと・聞くこと」の関心・意欲・態度や技能を高めるために、その子らしさを生かし、意図的・チャンス的にはげましをしていくことが必要である。

一例をあげるが、K男へのはげましとその後の姿は下のようであった。

K男は、お金ロボットがあつたらいいなと思うわけについて、十分に話せていなかったのだが、具体的にどう話せばいいのか、友達と聞き合う中で、考え練習することができた。

みとどけの窓をはっきりもって、はげましていくことにより、子ども達は本時の課題を意欲的に追究し、解決の喜びへとつながるのである。

K君らしき

自分の考えを、つまりつまりでも最後まで話せる。支援をすれば、順序立てて話すことができる。発想がユニークである。

K君の第三時・活動二の姿

「ぼくがあつたらいいなと思うものは、お金ロボットです。わけは、何円でも出してくれて、欲しい時に欲しいだけお金が出てきます。ドラえもん の形をしていて……。」

K君へのはげまし

「なるほど、先生もそんなロボットが欲しいな。おもしろい発想ですね。(認める)」

でも、今の話を聞いてみると、あつたらいいと思うものは分かったけど、どうしてそう思うか分かった？(ペアになっている子に尋ねた)

わけは、と言っていたけど、わけになっていなかったから、どんなふう話すといいか考えてごらん。(方向を示す)」

K君の変容の姿

「ぼくがあつたらいいと思うものは……。そのわけは、自分の欲しいものが何でも買えるからです。何円でも欲しいだけお金が出てきて……。」と、話の内容を考えて話し、友達に聞いてもらっていた。

## 五、実践——仮説(三)

### ★学級経営における言語環境づくり

子ども達は、一日の生活の中のほとんどの時間を学級で過ごす。いわば、学級は一つの社会であるといってもよい。

話すことが苦手な子にとって、最も大きな障害となるのは、話したいという思いが友達に通じない学級の雰囲気である。すべての子ども達の心が開かれ、自由に語り合える学級の雰囲気作りを考えていくことは大切である。そこで、「話す力・聞く力を培う指導構想」に位置付けられているように、学級内の言語環境の整備に努めてきた。(資料1—1)

#### ①話す場を増やした日直

#### ②発声練習や詩の朗読・群読を中心とした

「ひびきあいタイム」(資料2—1)

#### ③一分間スピーチや、子どもの好きな話題を取り入れた

「おしゃべりタイム」(資料2—2)

#### ④大事なことを落とさずに聞く

「聞き耳タイム」(資料2—3)

#### ⑤教師の意図的な話

などを通して、自分自身の言葉の使い方や、話ぶりに気を配る子ども姿が増えてきた。

## 六、成果と課題

◎物語文や説明文の学習で、グループ読みを取り入れたことにより、話す場が増えて自分なりの考え方を確かにすることができ、全体の場でも積極的に話をする子が増えてきた。

◎話し合い、聞き合い、学びあうことの楽しさや喜びを知り、話の内容、話の構成、話し方の工夫について気を配りながら話す子ども姿が増えてきた。

・単元及び単位時間の中で生かしていきたいその子らしさの把握にいつて、さらに多面的にかつ累積的に把握し、確かなその子らしさを捉えて授業に生かしていきたい。

### △所見▽

「現状維持即退歩」という言葉を聞いたことがある。現状維持を願う生き方は、停滞どころか既に退歩しつつある証左である、という意味であろう。いろいろな可能性を秘めながら明日に向かって生きる子どもたちと共に日々の学校生活を送る小中学校の教師にとっては、この言葉のもつ意味は特に大きい。

子どもにとって最大の不幸は、自分の担任が現状維持志向の教師であるということだろう。教育は創造の仕事である。日々の実践の中から、何を、どのように指導・助言・支援していくのかを見出し、



考え、工夫し、そして新しい実践を生み出す努力を続ける——  
現状維持を望まない「若き」に溢れた教師に担任された子どもたちはどんなに幸せなことだろう。

村上百合子氏は本学昭和六十二年度の卒業生であり、現在本学と同じ町内にある柳津小学校教諭として活躍中である。

新年度、村上氏が新しい出会いを持った学級の子どもたちは、文字言語の場合とはかく、音声言語に関しては、国語教師として「これでいいのか」と思うような状況があったに違いない。——分かっていても挙手しようとしな。問われたことにぼつんと単語でしか答えられない。ぼそぼそと聞き取りにくい声でしか話せない。話す内容が貧弱である。友達の話が落ち着いて聞けない。……

村上氏が、この現状を、日々の実践を通して何とか打開していかねばならないと考えた基底には、学級の子どもたち一人一人への熱い思いがあったことは当然として、国語科の立場からは、次のようなことがあったと考えられる。

一、平成元年の小学校学習指導要領の改訂に先立っての教育課程審議会の答申の中に、「国語科についての改訂の考え方」の二番目の項目として「話すこと・聞くことの指導の重視」が挙げられ、「改訂の要点」の中でも、「音声言語による表現力は従前以上に重視することにした。」「学校生活全体で積極的に話す、聞く指

導の機会をもつとともに、音声言語のための教材開発に努めることが大切である。」と述べられていること。

二、その答申に基づいて改訂された学習指導要領の中に、「学校生活全体を通して、言語に対する意識や関心を高め、言語環境を整え、児童の言語活動が適正に行われるよう努めること。」(総則、配慮すべき事項 2の(1))、「音声言語に関する指導については、……日常生活の中に話題を求め、意図的、計画的に指導する機会が得られるようにすること。その際、音声言語のための教材を開発したり、活用したりするなどして、指導の効果を高めるよう工夫すること。」(国語、各学年にわたる内容の取り扱い 1の(4))と述べてあること。

三、従来の「国語」の授業では、どの学年においても、登場人物の心情、作品の主題・要旨、段落の要点等々、内容理解に主力が注がれ、「言語の教育を行う国語科」の意識が国語教師の中でも希薄であったこと。まして音声言語の場合は、日常生活の中で子どもたちが経験によって習得した結果に安易に依存してきた状況があること。

村上氏が国語教師として実践研究の主題に取り上げた「生き生きと表現できる子をめざす国語科学習——話すこと・聞くことの指導を中核として——」

は、学級の子どもたちの実態と、学習指導要領の求める方向と、これまでの国語科指導上の問題点とを踏まえた、まさに今日的課題であると言うことができる。そしてまた、そうした着眼の良さは、結局のところ、氏が平素から子どもたち一人一人をよく見、現状維持を望まない授業を積み重ねてきた結果である、と言うこともできるであろう。

更にまた、課題解決のための実践を行うに当たって立てた仮説についても、よく考えられた適切なものであると言うことができる。

仮説(一)のグループ学習については、これまでどちらかというところ、全体学習のための単なる方便として、思いつきのように授業の中で使われてきたが、氏が意図するものを更に突き詰めていけば、グループ学習と全体学習との意義・性格の異同が一層明確になるものと思われる。そして、これまでの「ひとり学習→全体学習→ひとり学習」という学習パターンが、「ひとり学習→グループ学習→ひとり学習」と、グループ学習それ自体が全体学習と同等の意味をもつパターンも考えられるようになってくる気がする。

「国語」の授業からは、教師主導型一斉授業のイメージはなかなか抜き去ることができない。村上氏の提唱するグループ学習の突き詰めが、単に話す・聞くという音声言語の観点からばかりでなく、教師中心・一斉授業のパターンを変革して行く契機ともなればと願

うものである。全体学習の中における「パネルの話し合い」の試みは、その一つであろうと思われる。

仮説(二)の「話すこと・聞くこと」の小教材については、これまで国語教科書にも、話す、聞くということについての心得とか技能について説明するコラム的なものがあるにはあった。しかしそれは、子どもたちがその説明をもとに、話す、聞く活動が必然となるような内容で具体的な学習をすることには発展せず、単に知的理解にとどまるものでしかなかった。

日常生活の中では、常時、話す・聞く「場」が存在しているが、日常的な人間関係の中では、話す・聞く内容においても、話し方・聞き方においても言葉を通さなくても理解し合える要素がいくつもあるために、音声言語による表現・理解の内容や方法がいかげんなものになってしまう。この的確さ、適正さを欠いたものを正すことなく、これまでの「国語」の授業が行われてきたと言っても過言ではないだろう。

村上氏による仮説(二)は、読むこと・書くことも含めて、安易に日常性によりかかってきた観のあるこれまでの「国語」の授業を、国語科の本質としての「言語の教育」へ立ち戻らせる契機となるのではないかという期待がある。

仮説(三)の言語環境づくりも、話すこと・聞くことの意識的な

「場」が、小刻みではあるが連続している点、あるいは、「場」の設定が、全校朝会、学級朝の会、帰りの会、特別活動など学校生活の日常性をもったところでもなされている点、そしてそこで子どもにとって興味ある内容での練習と指導がなされる点等々、創意工夫が感じられる。

「国語」の授業での意図的指導、そして学校生活のいろいろな場における意図的指導、両者が関連し合いながら展開されていくことで、どのような成果が現れるのか、期待して見守りたい。

大部な資料（本誌にはその一部を紹介）の添えられた村上氏の記録は、平成五年度羽島郡四町教育委員会主催の実践研究論文募集に応募したものであり、更にそこから推薦されて、岐阜県全県の教員を対象にした第九回岐阜県小中学校教育実践研究論文審査にかけられ優良賞に選ばれたものである。

国語国文学会員の学生諸氏も、卒業後、実践をまとめた報告、レポート、論文の類を書く機会が多々あるであろう。三回生から取り組む卒業研究を論文にまとめる仕事も、単に大学卒業で終わり、というわけではない。研究題目の設定、テーマへの切り込み方、資料収集・整理・利用の仕方、論の進め方等々、卒業論文をまとめるに

当たって学んだ総てのことが、卒業後にも生きて働くわけである。

村上百合子氏のように、現状維持に満足せず、子どもと共に求め、伸びようと燃える先輩会員諸氏が数多くいることを思い、学生会員諸氏が折角精進されるよう願うものである。

（国語教育担当 高橋 弘）